Howards End

ハワーズ・エンド

E・M・フォースター

吉田健一訳

集英社

ハワーズ・エンド

E・M・フォースター
吉田健一訳

集英社

HOWARDS END
by
E. M. Forster

ハワーズ・エンド
一九九二年五月一一日　第一刷発行
一九九二年八月一〇日　第三刷発行

著　者　E・M・フォースター
訳　者　吉田健一（よしだ けんいち）
編　集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）三二三九―三八一一
発行者　若菜　正
発行所　株式会社集英社
一〇一―五〇　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　編集部（〇三）三二三〇―六〇九四
販売部（〇三）三二三〇―六三九三
制作課（〇三）三二三〇―六〇八〇
印刷所　凸版印刷株式会社

©1992 Shueisha
本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

二、四〇〇円

ISBN4-08-773147-2 C0097

ハワーズ・エンド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ハワーズ・エンド　7
解説　池澤夏樹　375

装　　幀　スタジオ・ギブ
写真提供　ヘラルド・エース

「ただ結びつけることさえすれば……」

1

まず、ヘレンがその姉に宛てた何通かの手紙から始めたらどうだろうか。

ハワーズ・エンドにて　　火曜日

メッグ

わたしたちが考えていたこととは大違いで、古くて小さくてなんとも感じがいい、赤煉瓦の家。今の人数だけでもういっぱいで、ポール（これが若いほうの息子）が明日着いたら、どういうことになるのか解らない。玄関の右が食堂、左が応接間で、玄関も一部屋になっていてそこから別な戸を開けると、トンネルのような階段があって二階に行ける。二階には寝部屋が三つ、その上の三階に屋根裏の部屋が三つ。それがこの家の全部ではないけれど、目に留まるのはそれだけ。――前庭から見ると、窓が九つ。

それから庭と牧場の境に、家に向かって左側に、家に少し被さって大きな楡の木が一本生えている。その木がすっかり好きになってしまいました。またその他にもっと普通の楡や、樫の木や、――それが普通の樫の木並みにしかいや味がなくて、――まだ他に梨の木や林檎の木、それから葡萄の木が一本ある。白樺なんかありません。これはそのくらいにして、ウィルコックス夫婦のことを書かなければならないのだけれど、以上は、私たちが考えていたこととはぜんぜん違っていることをお知らせしたかったものだから。なぜ、わたしたちはこの夫婦の家が切妻やなんかだらけで、庭は黄色い小道がそこらじゅうにあると思ったのかしら。ただ、この二人を贅沢なホテルと結びつけて考えて、綺麗な服の裾を引いて長い廊下を通って行くウィルコックス夫人や、給仕を怒鳴りつけているウィルコックス氏のことしか頭になかったからのようで、どうもわたしたち、女というものはそういう見方ばかりしている感じがします。

土曜に帰りますが、汽車の時間はいずれお知らせします。みんな、あなたがこなかったのをわたしと同じ

くらい、怒っています。ティビーはなんという子なんでしょう。毎月、別な病気にかかって危篤になっている。それに、どうしてロンドンで枯れ草病なんかにかかるんでしょう。また、かかったとして、それであなたがロンドンに残って中学生がくしゃみをするのを聞いていなければならないということはないと思います。ティビーに、チャールス・ウィルコックス（今ここにきている息子）も枯れ草病にかかっていて、それでも泣き言をいわず、他のものがどんなぐあいか聞くと非常に不機嫌になるとお伝えください。ティビーも少しこういう人たちを見習ったらいいと思うのだけれど、あなたは賛成なさらないでしょうから、他のことを書きます。

こんな長い手紙を書くのは、まだ朝の食事の前だからです。ここの葡萄の葉が綺麗なことといったら。この家は葡萄の蔓で蔽われています。今から少しばかり前に窓から見たら、ウィルコックス夫人がもう庭に出ていました。ここの庭がほんとうに好きのようで、それで時どき、あんな疲れた顔つきになるのだと思います。さっきは大きな赤い罌粟の花が開くのを眺めていて、そのうちに芝生から、ここからも右側の隅がやっと見える牧場のほうへ行きました。まだ露で濡れている芝の上を夫人はその服の長い裾を引き摺って行って、それから乾し草を作るために昨日刈った草を両手で持って戻ってきました。――それを何度も嗅いで、兎にでもやるのじゃないかと思います。この辺の空気はなんとも新鮮。そのうちにクロケーの球を打つ音が聞こえてきて、また窓から覗くと、チャールス・ウィルコックスが練習しているのでした。ここの人たちは運動ならばなんでも熱心です。そのうちに、くしゃみを始めて、やめなければならなくなり、その次にまた、球を打つ音がしたのは、今度はウィルコックス氏で、これもそのうちにくしゃみを始めて練習はやめ。それからイーヴィーが出てきて、青李の木に結びつけた機械で（ここでは青李の木もそんなふうにして役に立てる）美容体操を始めたところが、これもくしゃみを始めて家の中に入ってしまった。そこへ最後にウィルコックス夫人がまた現われて芝生の上を服の裾を引き摺って行き、まだ乾し草を持って嗅いでは花を眺めている。こんなことをいちいち書いたのは、あなたがいつか、人生は時には人生で、時には単に劇にすぎないことがあり、その二つを区別しなければならないと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いったことがあるからで、わたしは今まではそれがメッグのいつもの利口ぶった出鱈目と思っていたけれど、今朝は人生がほんとうに人生ではなくて芝居のように思われて、ウィルコックス一家を見ているのがとてもおもしろかった。今、ウィルコックス夫人が戻ってきました。

今朝はわたしは〔空白〕を着るつもりです。昨晩はウィルコックス夫人は〔空白〕、イーヴィーは〔空白〕を着ていました。だから、この家はそうなんだってかまわない式の所ではなくて、眼をつぶると、やはりわたしたちが考えていた、長い廊下のホテルにいるような気がする。でも、眼を開けるとそうではなくて、それには野薔薇が綺麗すぎる。その大きな生け垣が芝生の片方にあって、恐ろしく高くて花が滝になって落ち、下の所がちょうどいいぐあいに空いていて、そこを通して家鴨が何羽かと牝牛が一匹見える。これは隣の農家ので、他にこの近所に家はありません。朝の食事の銅鑼が鳴っています。お元気で。ティビーにある程度までよろしく。ジュリー叔母様にもよろしく。あなたのために泊まりにきてくださるなんてほんとうにご親切だけど、なんて退屈な方なんでしょう。この手紙を焼いてください。木曜日にまた書きます。

ヘレン

ハワーズ・エンド

金曜日

メッグ

ここでほんとうに楽しい思いをしていて、この家の人たちがみんな好きになっています。ウィルコックス夫人はドイツで会ったときよりは静かなだけで相変わらず優しくて、こんなに他のもののために尽くす人を見たことがないし、何よりも気持ちがいいのは、だれもそれにつけこむものがいないことです。この一家はほんとうに幸福そうに暮らしていて、ここの人たちとは確実に友だちになれそうな感じがします。おもしろいのは、ここの人たちがみんな、――少なくとも、ウィルコックス氏は、――わたしのことを大馬鹿だと思っていることで、それでもそれが気にならないのは、この人たちと親しくして行けることのかなり信用していいところではないかと思います。ウィルコックス氏は婦人参政権についてひどいことを、ちっとも不愉快でない調子でいって、わたしが人間は平等であるべき

だと思うといったときなどは、腕を組み合わせて、わたしを完全に料理してしまいました。メッグ、どうしてわたしたちはこうお喋りなんでしょう。わたしがあんなに恥ずかしい思いをしたことはありません。わたしは人間が平等だった時代も、平等であることを望むことが人間を幸福にしたことがある時代さえも示すことができなくて、まったく一言もなかった。そんな人間は平等であるべきだというような考えを本か何か、――きっと詩か、それでなければあなたから教わったらしくて、とにかく、それが粉微塵にされて、ほんとうに強い人はみんなそうだけど、ウィルコックス氏はそれをわたしにいやな思いをさせないでやって見せました。その一方、わたしはみんなが枯れ草病にかかっているのをからかって、わたしたちは顔を合わせれば言い合いを始めます。チャールスが毎日、わたしたちを自動車で遠乗りに連れて行って、木が生えている塚だとか、隠者が住んでいた家だとか、マーシアの王たちが作らせた立派な道だとか、クリケットの試合だとかを見たり、テニスやブリッジをしに行ったりして、夜はこのすばらしいというほかない家でみんないっしょに過ごします。この一家の人たち全部が今はここに集まっていて、大入り満員です。イーヴィーは可愛い。わたしに日曜日までいるようにとみんないっていて、わたしもその気になっています。天気も、眺めも、――西のほうの高地に向かっての眺めも、――このうえなしというところ。お手紙ありがとう。これは焼いてください。

ヘレン

ハワーズ・エンド

日曜日

メッグ

あなたがなんというか知らないけれど、ここの人たちの若いほうの息子で、水曜日にここに着いたばかりのポールとわたしが愛し合う仲になりました。

2

マーガレットは妹からの短い手紙を一眼見て、朝の食事のテーブル越しにそれを叔母のほうに押しやった。それからほんのわずかな間たって、二人ともいきなり口を

利き始めた。
「わたしから何もお話しすることはないんですよ、ジュリー叔母様。わたしだって何も知らないんですもの。あの人たちとは、――そのお父さんとお母さんに今年の春、外国で会っただけなんです。その息子さんの名前がなんというのか今度初めて解ったくらいなんです。これじゃあまり――」マーガレットは片手を振って見せて、少しばかり笑った。
「それじゃあまり急じゃありませんか」
「でも、それは解りませんでしょう、叔母様」
「それでも、マーガレット、こういうことになったんだから、わたしたちもよく考えなければいけないでしょう。とにかく、あまり急じゃないかしら」
「それは解りませんでしょう」
「でも、マーガレット――」
「ヘレンの他の手紙を持ってきましょうか」とマーガレットがいった。「やめときますわ。食事をすませたほうがいい。それに、他の手紙はもうないんです。ウィルコックスさんたちにはハイデルベルヒからシュパイヤーにひどい遠足に行ったときに会ったんです。ヘレンとわたしがシュパイヤーには立派な寺院があると思って、――シュパイヤー大僧正が、ほら、シュパイヤーとマインツとケルンのシュパイヤーで、七人の神聖ローマ帝国の選挙侯の一人で、その三つの管区がライン河の沿岸に並んでたんでライン河が『坊さん通り』って呼ばれることになったんです」
「この今度のことが気になるのよ、マーガレット」
「汽車が河にかかっている鉄橋を渡って、そのときは寺院も立派に見えたんだけれど、そこへ行って五分とたたないうちに、もうすっかり見てしまったことになって、あそこの寺院がもとの建物を何も残さずに修復されてたことを知らなかったんです。それでまる一日、無駄になって、公園で二人でサンドイッチを食べているときにウィルコックスさんたちに会ったんです。ウィルコックスさんたちもそんなこととは知らなくて、これは可哀そうに、シュパイヤーに泊まっていて、ヘレンがいっしょにハイデルベルヒにくるように勧めたのが気に入ったらしかったの。そして翌日、ほんとうにきて、みんなで自動車の遠乗りに何度か行ったりしたんです。その程度にわたしたちと親しくなって、それでヘレンにウィルコックスさんたちの所に泊まりがけでくるように、――じゃなくて、わたしも呼ばれてたんだけど、ティビーが病気に

なったもんだから、先週の月曜にヘレンだけ行くことになって、それでもう叔母様にお話しすることは何もないわけなの。ですから、その息子さんがどんな人かも解らないんです。ヘレンは土曜日には帰るはずだったんですけれど、月曜まで延ばして、それはきっと、――いえ、そうじゃないかも知れないけれど」

マーガレットは途中で話をするのをやめて、ロンドンの朝の音に耳を傾けた。マーガレットたちの家はウィッカム・プレースにあって、そこが割に静かなのは表通りと高層建築の一山を隔てているからだった。それでそこは水溜り、であるよりも、満潮になるとそこからは見えない海から音が流れこんできて、干潮になってまだまわりでは波が打ち合っているのに音が引いて行き、後に沈黙が残る河口に似ていた。その一山の建築は住宅ばかりで、玄関が大きな口を開け、中は門番と鉢植えの棕櫚でいっぱいだったが、役には立って、向かい側のもっと古い何軒かの家にある程度の静寂を保証した。しかしそういう家もいずれは壊されて、ロンドンの貴重な地面で人間がだんだん高みに住むようになるに従って別な高層建築の一山がそこに作られることになるのだった。

マント夫人はその姪たちがすることを解釈するのに自分なりの方法に従っていた。彼女はマーガレットが少し取り乱していて、気分が落ち着くまで立て続けに話をすることで時を稼ごうとしているのだと判断し、それに調子を合わせるつもりでシュパイヤーの寺院がそんなになったことを嘆き、自分はけっしてその寺院を見物しには行かないといって、さらに、ドイツでは修復するということの意味がよく理解されていないのだとつけ加えた。

「ドイツ人というのは何をするにも、徹底しすぎるんですよ」と彼女はいった。「それでいい場合もあるけれど、困ることだってあるんですよ」

「そう、徹底しすぎるんですね」とマーガレットはいって、眼が光を増した。

「勿論、わたしはシュレーゲル家のあなたたちを英国人と思っているんですよ」とマント夫人は急いでいった。「骨の髄までのね」

マーガレットは体を乗りだして、夫人の手を撫でた。

「それで、ヘレンの手紙だけれど――」

「ええ、そのことも考えているんですよ、ジュリー叔母様。――ヘレンの所に行ってやらなければ。ヘレンのことは考えているんです、これから行ってやらなければって」

「でも、こっちがどうするつもりか決めてからね」とマント夫人はやさしい口調で話をしてはいても、いくらか焦り気味になっていった。「こういうと差し出がましいかも知れないけれど、慌ててはいけませんよ、マーガレット。そのウィルコックスというのは、どういう人たちなのかしら。わたしたちと同じような人たちでしょうか。これからもつき合って行ける人たちなのかしら。わたしはヘレンが普通の人間とは違った特別な人だと思っていますけれど、そのヘレンが解る人たちでしょうか。例えば、文学とか、芸術とかに関心があるんでしょうか。それが大事なことなんですよ、考えてみれば。非常に大事です。その息子さんというのはいくつくらいの人なのかしら。若い方ということだけど、結婚できるのかしら。ヘレンを幸福にさせられるような人なのかしら。そういうことについてあなた、何か――」

「わたしは何も聞いていないんです」

二人は同時に話を始めた。

「それならば――」

「だから、何もこっちでは決められないんですよ」

「そうじゃなくて――」

「わたしは決めてかかるなんてことは嫌いですもの、こういう方針で行くなんていうことは。それに、ヘレンももう子供じゃないんだし」

「でも、それならば、どうしてヘレンの所に行くの」

マーガレットは黙っていた。もし叔母に、自分がなぜヘレンの所に行かなければならないのか解らないならば、それをいうつもりはなかった。「わたしは妹を愛していて、それでこの際、妹の傍にいてやりたいんです」という気はしなくて、愛情というのは情熱よりも無口でもっと微妙な形で表現されるものなのである。もしマーガレットもだれか一人の男を愛することになったら、ヘレンのように公然とそのことを発表するに違いないが、今は一人の妹を愛しているだけだったから、同情の無言の表現によるほかなかった。

「わたしはあなたたちが変わった二人だと思ってますし」とマント夫人が話を続けていった。「非常によくできているし、年よりもずっとしっかりしているとも見ていますけれど、正直にいうと、――怒っちゃ、いやよ、――今度のことはあなたたちの手に負えないっていう気がするんです。もっと年取ったものがいなきゃならなくて、わたしがいま急いでスワネージの家に帰らなければならない用事は何もないんです」とここで夫人はその太

った腕を拡げて見せた。「わたしを使えばいいんですよ。わたしがその、なんという名前だったかの家に行きましょう」

「ジュリー叔母様」とマーガレットは飛び上がって叔母に接吻していった。「あのハワーズ・エンドという名前の家にはわたしが自分で行かなけりゃならないんです。叔母様が代わりに行ってくださるっていうのはほんとうにお礼の申し上げようがないことなんですけれど、叔母様にはお解りにならないことがあるんです」

「いいえ、解っているんですよ」と夫人は自信に満たされていった。「わたしはお節介をしにじゃなくて、調べるために行くんです。それは必要なんですから。それで、失礼なことをいわなくちゃならないけれど、あなたならきっと何か下手なことをします。それは解っているんですから。ヘレンのことが心配で、あなたのいつもの調子でウィルコックスの人たちをみんな怒らせてしまうような質問をしたりするのに決まっています。――もっとも、ほんとうはそれでいいんですけれどね」

「わたしは質問なんかしません、叔母様。ヘレンが手紙である男を愛しているといってきていて、ヘレンの立場がそれであるかぎり、質問なんかすることは何もないでしょう。他のことはどうでもいいんですもの。婚約している期間が長引くのはかまいませんけれど、調べたり、質問したり、計画を立てたり、方針を決めたりするのはいけません、ジュリー叔母様」

そんなふうにマーガレットは立て続けにいって、彼女は美しくもなかったし、頭の働きが目覚ましくもなかったが、その両方の代わりになるものに満たされている感じだった。――それはある種の烈しい生命力、彼女がその人生の途上で出会うすべてのことに対する不断に誠実な反応とでも呼ぶほかないものだったかも知れない。

「もしヘレンがどこかの店の店番か、一文なしの会社員について同じことをわたしにいってきたとしても――」

「マーガレット、書斎に行って戸を締めましょう。女中たちが階段の手摺にはたきをかけています」

「――もし家に荷物を取りにくる運送屋と結婚する気になったとしても、わたしは同じことをいうでしょう」そしてそこで方向を転じて、マーガレットにはそれがあるので例えば、今の場合は、叔母がほんとうはマーガレットもしっかりした女なのだと思い直し、もっと人間を観察するものは、彼女が理論しか頭にない理論家ではないのを感じるのだったが、「もっとも、それが運送屋さん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com